Argonauta 21:17-18 (2012)

大垣俊一さんの一つの集大成

久保田　信

京都大学瀬戸臨海実験所年報 25 巻を 2011 年 6 月 7 日現在編集中であるが（6 月中旬発行予定)、その中の「研究報告抄録」という項目に挙げている一つが、大垣俊一さんの一つの集大成である。それは、瀬戸臨海実験所研究報告（Publications of the Seto Marine Biological Laboratory）の Special Publication Series 第 11 巻に掲載されたもので、2011 年 11 月 15 日に発行された。これへの掲載論文は大垣さんらの 1 篇、Ohgaki, S., Komemoto, K. & Funayama, N. 2011. A record of the intertidal malacofauna of cape Bansho, Wakayama, Japan, from 1985 to 2010.（大垣俊一・米本憲市・舩山展孝: 和歌山県番所崎の潮間帯における 1985 年から 2010 年の軟体動物相の記録）だけである。.総頁数が 311 頁もの労作で、その概要は、「和歌山県田辺湾の番所崎海岸 4416 ㎡の岩盤上で、1985―2010 年の 25 年間、貝類相の調査を行った記録集。調査地の環境条件、出現した 242 種の全軟体動物のリストと各種の属性、年ごとの出現頻度、主要 100 種の経年分布変動図、及び結果の信頼度を検証するための方法検討調査の結果を示した。一般的傾向としては、１．海側から陸側にかけて貝類相の特徴から 4 地帯が区別され、そのパターンは調査期間を通じて安定。２．南方性、熱帯性の種数、累積分布範囲が期間中徐々に増加。３．1997/98 年に貝類相全体として断絶が認められ、北太平洋生態系のレジーム・シフトのタイミングに同期」。というものである。この内容は、実はご本人にお願いし、もう少し詳しい内容で頂いたものである。その修正は、私が英文も邦文も編集長だったので、大垣さんの了解をとって（2011 年 4 月 29 日付のメイル：大垣です。先にお申し越しの抄録について、大ざっぱですが、以下のようにまとめてみました。体裁の不備等は適当に補足、修正していただいて結構です）簡略化した。この大垣さんの長年のまとめの発刊に際して、次のようなメイルを 2011 年 12 月 6 日に頂いていたので、ここに紹介したい。「大垣です．先日 Special Publication 共著者の米本憲市氏が臨海図書に出向き, 興田さんから 60 部を受領しました．昨日は早速共著者間で，受け取り分の配布等について話し合ったところです．久保田さんには 7 月以降，出版に向け積極的に作業を進めていただき，大変お世話になりました．出版は年度内くらいかと思っていましたが，年内に完了，配布可能な状態になったことは僥倖と思っております．Publication の発行は，建前上実験所職員の業務の一環であるとはいえ，直接自らの業績になるわけでもない仕事にエネルギーを傾注することは，時に心理的な抵抗もあることであろうと拝察します．その点も含め，今回のご配慮に対し，改めてお礼を申し上げます． 以上，受領のご挨拶まで.」。勿論、この編集に関しては編集委員であ

る瀬戸臨海実験所教員全員の多大なる協力があった。例えば、2011 年 7 月 12 日に、「たびたびすみません、久保田です。助教の中野智之さんが、原稿に目を通されてます。「仕事量等、非常に長い時間をかけてよく調査されています」とのことです。コメントは、「現段階の原稿では、図用メインの報告止まりとなっていますが、図から見ても最近急激に増えた種や、逆に減った種、また過去から現在までほとんど変わらない種などがいて、そのあたりの議論があればもっと有意義で面白い論文になると思いました」ということです。ご検討ください」。また、この編集は前所長の白山義久教授が急に転任されたので引き継いだものであった。大垣さんらの原稿はたいへんよくまとまっており、英文校閲も受けたので、編集には苦労はそれほどなかった。

此の他、問い合わせや確認のメイルを大垣さんと交わしたので紹介したい。2011 年 7 月 15, 24 日：「「数値を最新の文献で」というのは、番所崎で発見された各分類群の種数ということならば、お渡しした番所崎のデータ集の値が最新ということになります。つまり、多板類 9 種、巻貝類 191 種、二枚貝類 42 種です。ご参考までに」。「番所崎の同定ガイドですが、2008 年版が Argonauta の HP で公開されています。これが最新版ですが、冊子体は作っていませんので、必要でしたら、ダウンロードしてご利用ください」。

最後に、2012 年 4 月末日（確か 29 日の翌日で 30 日だったと思う）、「・・・連綿として率先して実施されておられる瀬戸臨海実験所所轄の畠島の生物調査のまとめなども、これからまた投稿を是非・・・」とお願いした。大垣さんのお体が非常に悪いこともつゆ知らずにそんなことを言ってしまったが、体がどこか悪いそぶりなど全く見せず、いつもバイクに乗って実験所にやってきて紳士的な様々なお話をしてくださった。大垣さんのご冥福を心からお祈り致します。

追記（2012 年 11 月 14 日）

黒潮貝類同好会の「本覺寺杼貝」第 67 号（本年 9 月 21 日発行）に大垣俊一氏追悼の 3 篇が掲載された。大垣さんは貝好きおたくたちが集まるこの会で色々な面で楽しんでおられたことがわかります。

（くぼた　しん・京都大学瀬戸臨海実験所）